
星降り双子

suzumiya1987

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星降り双子

【Nコード】

N3158R

【作者名】

suzumiy a1987

【あらすじ】

普通の高校一年生、兼城一馬がいい運で一流の学校『玄武高校』に入った。何の特長もない彼がクラスメートを舐められ。負けないと決まった彼が唯一の長所、料理って人を見直させる。中間テスト、『興味総合』の料理試験、教室に突然『光を探す』の少女我妻蝉麗と出逢った。

EP1（前書き）

普通の高校一年生、兼城一馬がいい運で一流の学校『玄武高校』に入った。何の特長もない彼がクラスメートを舐められ。

負けないと決まった彼が唯一の長所、料理って人を見直させる。

中間テスト、『興味総合』の料理試験、教室に突然『光を探す』の少女我妻蝉麗と出逢った。

蝉麗は一馬が『光を引き寄せられる』と認定する、そして彼を狙った、軟派してくる。

偶然蝉麗の携帯を拾った、その携帯は彼の兄上我妻準星配置した『蝉麗追跡機』が全然気付かなかった一馬が準星の手下に捕まえられた。

拷問の下、おとなしく自分と蝉麗に遭遇したことが兄上を話した以後、その準星は一馬を利用する気がある。

利用の内容は一馬と蝉麗が恋をする、そして『光から離れ』。

十年前で、蝉麗と同じ流星衝撃事件が経歴した準星が親父の立場に立って、蝉麗が『光を見える』のは単なる妄想病気と認定した。

この十年間、いろいろの方法をして蝉麗の考えを消しても、無駄だ。ようやく思春期を入った蝉麗が『恋』の力でその子を『正常化』する。

一馬が150段階の『理事長ビル』を連れて、すべての事情が教えてあげた。一馬の目の前で、準星がこの過去を思い出した。父と違い論調『妄想病気』として、流星雨と光のことが本当って承認したとしても、蝉麗が『妄想』のほうがいいと考えた準星が依然一馬の手伝えがほしい。

EP 1

プロログ

眼球は痛くて、いつもの通り、一馬は窓から遠いところを見てた。その目が届く場所で一人の少女がいる。いいえ、少女みたいな隕石朝起きの目は未だ開けない、幻覚とか塵気楼とか、その少女の姿は幻ろしくてあの町の中心に座っている。

少女の姿と言っても、実に十年前の事件と関わって双子座流星雨の欠片。片腕は三つの新幹線の軌道を徹底的に破った、そして腰の部分は今商業街70パーセントの建物を潰した。でも、綺麗ですね。

一馬があの子を見て、夢中になってしまった。

隕石よりダイヤモンドのほうが相応しい。星夜の下、少女の身の上で水晶粒のように光っている、丸で天使の姫のように、月の傍で美妙的な協奏曲を弾いている。

その急逆に、一馬は教室の方向を向かって見て、『やばい』『やばい』って呟いている。原因は黒板の前に立ってる数学の先生ではない、彼は教鞭を握っても、生徒だちにオカルトのような符号で自分の大演説を喋っていても、全然こっちの動きを見えなかったようだ。

違うんだ。この村井先生は学校内で第一のスナイパー、通称『ブラスのメガネ』、鬼のような恐ろしい目とは生き物の一匹たりとも見逃さず監視してる能力が持ってるらしい。

『一馬君、どこに行くつもりじゃ？』

関西弁を使っ、あっちにいる白髪は村井先生だ。彼の眼差しは発砲した弾丸みたい一馬の前額の前、刀のように切っ、あがった。

『ごめんなさい』

大げさな叫びと共に、千回のいやな予感をして一馬が教室のドア

から飛び出した。『この先生の目の下で逃げる気にもゼロ可能の任務』。同じクラスとおさ馴染みの黒井が自分の手帳にもう一回その戒律を書き加えたり、嘆きたり彼の壮絶の未来を想像したりしてる。前の回、一馬は村井先生のおかげで、2000メートルのトラックを10度目で走り切れた。その体罰は普通高校生にとって耐えられるのか。

それより、黒井にはもっと分からないことは。あんな以上、なぜ自分を顧みらず外を出ていき、一馬はほんとお馬鹿さんですか？

ズボンのポケットとで、新しい買った携帯は地震のように震えている。スクリーンの上、同名同姓の名前は並んでる兵士のように出現してた。先の『やばい』のことはこっちです。このメールの主人はあの子、我妻蝉麗、正確の言い方は今この高校の理事長我妻正司の娘だ。どうして一馬はあの子とかかってくれたの、まあ…今で話の暇もないだ。

今回待ち合わせの場所は学校の剣道部、メールの指示にそって、一馬がもうここの訓練場の中央に立った。でも、何も見えなかった。もう一度この広場のような畳式の訓練場を見回ってきれ、人影らしいの物体がいるそうです。

疑惑がすぐ解けられた。

あの器材が積まれてる暗い隅に確かに一人の少女がいる、同時、その少女が一馬の傍へ歩いてきた。

繊細とか、可愛いとか。蝉麗のあの子は背は高くない。始めて見た時、一馬はロリという錯覚で考え違った。胡蝶形の結うは横に後頭部から左右して伸ばされて、薄い紫に浸まれた銀髪は水のように腕まで流れている。

『子供扱いするな、あたしはもう十六歳です。』

天使の羽毛のような声、鋭い子供らしく声が出された。その時、一馬がもうはつきり蝉麗の姿を見えた。

十六歳の唯一の証明は彼女のその『玄武高校』の制服だけだと一馬はそう思ってる。

『あんだ、考えてることを知ってるぞ。』

少女は少し頭をあげて、一馬の顔をじつと睨んで、『時間を浪費するのはだめ。』突然に蝉麗はびっこを引いて彼の首に寄ってきた。

『な…何よ』

急激の近いのせいで、一馬の心が乱された。前額の下、蝉麗の小さな唇は何が喋ってるようだ。

本能的に一馬は声をはつきり聞こえるために頭を下げる。近すぎるぞ。

今二人の姿勢がまるで恋人の間、キスをしておく様子。ようやくこれを気づいた一馬の心臓がどきどきになってしまった。

『いいえ。わたしたちは戦友だろう』一馬は自分の衝動っぽい感情が溢れそう、何故先の話をしたのか自分にも分からない。

同じころ、蝉麗の声が聞こえた。

『何を喋ってるよ、あんだ。』

何も発生しないまま、蝉麗は先の動きに基づいて逆に元の姿勢を回復した。『先で光を見えた。』

ほうとして、自分は何もわからないあの子とキスの妄想した後、もう一度彼らの共同話題に入った。

『そう、光ですね』

一馬は独り言で、その初めて見たことを思い出した。

第一章

座右の銘は普通、生活状態も普通、学績も普通の兼城一馬は何故この賀馬市一流の学校に入ってしまったの今まで自分が全然分からない。強いて言えば、きつと抽籤の神様は中学統一試験の間、視力下降になった、恐らくブランドって不幸と出逢ったかもしれない。とにかく、入学の最初彼は自分は優等生の中で満喫していた。

でも、優等の幻影は早く続々の模擬試験のランキングで幻滅の終焉を迎えてやがった。

『てえめはどっちの田舎でここに来れくれたの?』

『いいよ、てめえのようなキャラつつ できることはお弁当作りしかないよ。』

記憶の中、学校クラスメードはこの話は自分の拙さをあざ笑ってる男として必ず怒りがあるけど、仕方ない。

本来に一切のことは『普通』に目指す一馬は急にその『普通』って『下手』になってしまったの以上、もう普通の気持ちさえまでも使えなかったんだ。

最終一馬がクラスメードの蜚語を反撃した、反撃の手段は…『お弁当作り』。エプロンを着て、料理教室に立った彼は不思議の目を籠まれた。当然、その目は玄武高校の女子生徒からやってきたの。

両親には海外に日本料理を宣揚して始めることにはもう10年だった、それ以来、完全自宅の生活は一人の男は料理にとって特別な感情が生まれた。でも、一馬の料理と家族の日本式の料理と違いだ。日本料理の味を保留し、さらに中華料理の巧み、そしてお宅らしい『便利流』という一馬自分の料理を創造した。

まずはタコ焼、流し台から新鮮の章魚を取ったとたん、特製の汁で七輪の上に横に刺し連れ、最後に葱など味を放てる材料を敷いて。台湾式の作り方、その上、七輪にしても章魚の味を完全に表現できる。

さすが我が派の祖師、一馬は自分を褒めて忘我の状態に堕ちた。でも、今日の料理台にはちょうど違う感触がしたまま。一馬のエプロンの下、いつまでもあるがらがらの感じはなくなったように、何が温い物が台の中で動いてるらしい。

いやな感じが出てくれた、『何者か?』って小さな声で、一馬は異常の料理台下に『何があった。』その状況を試してやってる。

反応なし。人か、化け物か、大きなスプーンを持って、台の下、黒い洞窟の中で、きつと誰が正体不明の生き物があつた。

そして どこから言つて、そのものが一人の料理台の下で隠れた振り、考えても危険ばかりだ。

一馬のスプーンはエプロンの周りがあがつた頃、ちょうどいいで『人形』のものと同くくりぶつかった。

『い…痛いん』

口が地面を墮ちるように、一馬が顔の傷を覆いて銀色の獣みたい物体を見る。うそじゃないか。

『神様、俺を守ってください。』

生命安全の危ないが気づいた一馬が祈つたはやいが、スプーンを頭の上まで挙げた。その次、手に遮られた一つの目が少女の顔を曖昧に見えてきた。

先の『痛い』は自分の言葉じゃなかっただ。

銀色のは人の髪だよ。

はきつり見て、模糊な感触なんて人の髪でした。その上、銀髪には薄い紫の色が散られた、髪を持ち主は一人の少女だ。

『何がやってるあんた。』

少女は料理台の下から立ち上がて、不満な表情で一馬をじつと見つめてくる。でも、本当の可愛いの子です。

少女の顔を一見して、『近所の誰かの妹』とすぐに感じてくる。背は高くない、胡蝶式の結が結ばれ、まさかどっちの小学校から迷い込んだの。

その考えは少女の身の上で、玄武高校の制服を破られた。『うちの学校の生徒のか？』その言葉には一馬の口から未だ不信の口吻で言い出した。

『あんたバカですか？この玄武高校の紋章は知らないか？』

少女が自分の空港のような胸を指して、自信の言葉に身分を再現する。『おい、先何故そんな大きなスプーンを持ち上がり、あたしを

殺す気か？」

警戒の視線で少女が一馬の頭傍のスプーンから目をそらさない。

『それはこっちの台詞だろう？』

やっとスプーンを落とした一馬は自分で一番に被害者とする。『お前こそどうして料理台の下に隠れたのか？』

スプーンの脅威が解除したとたん、少女は少し心安いくなって、顔にはおだやかに転換した。

『光を探すぞ。』

平穏な速度で、薄いラインの弧度を描いた少女の唇、一言を言った。『光？それはなんですか？』

変に少女はその言葉を言った瞬間、顔色にも変化した。暖かくなつて、静かになつて。そして先の嫌い子供っぽいと全然違つて丸で別人になつた。神聖の声みたい、彼女の目の色彩は光の痕跡が出た。

『あの光は素敵の物ですね、温くて形もあるぞ、きらきらと星みたい粒が飾つてる。』

一馬には全く分らない、ぼうとして少女の目を見る。

『ごめん、さっぱり分らないです。』

一馬のその表現を見た後、少女は少し大袈裟な反応が起こるそうだ。やがて嫌いな小学生の様子を戻ってきた、拳までしつかと握つてる。

『あんたには理解できないとしても、何故そんな光に近い場所にいるくせに、あたしの言葉にわからないの？』

その話はこっちに言うべきだ。

心に少女の話をつつ込んだ一馬が口を尖らした彼女を見て、何故であんな言葉をしっかりと思つてる。

『あんたのいた料理台とは、光を引き寄せられる属性がある。』

また喋るの意味不明の言葉が少女のほうから伝えた、言葉までも関係なしに、彼女の鼻はおかしく動いてる。

『何それ』

視線はこっそり、いつも知らず台の上に置いてるタコ焼きを移動さ

れた。早い、少女には獣ように直接に章魚を捕まえて、五人を用意するタコ焼きを一気に食い込んだ。

一馬は無表情になった。

『お前 何故俺の料理を…』

正確と言え、一馬の気持ちは苦痛でした。知らない女の子は突然に自分を驚かした後、苦勞に作った料理を挨拶しないで喰った。しかも、今日の料理課程は中間テストだ。

大変になってしまった。

確かに、この子を出逢った真つ先、一生懸命に今の料理中間テストを準備してきた一馬は万事がいいと思った。この玄武高校の中間テストは国語、数学、英語、興味総合よつの成績から組み合わせられた総合評判製だ。つまり、三つの科目（国、数、英）には上手くない一馬で、唯一の逆転の方法はその興味総合に属される料理課程だ。もちろん、別々の科目は統一の採点で決算する、クラスメードにもこの方面だけで一馬と比べてならないところです。だから、一馬にとって料理テストは舐められないかんじんだ。

料理が食べられた今の一馬が

今月に予算不足のせいで章魚のような食材は余計の用意がなかった、先の五人ぶんにもぎりぎりでした。なぜその銀髪少女がふっと現れた…

『お前 やり過ぎるだろう』

普段に出ていけない叫び、あの未だ自分の指に舐めてる少女を吼えた。

この叫びをした後一秒、一馬には後悔してくる。高校生だけど、その子は小学生の感じみたい、その印象は一馬の心でつい刻まれた。妹がいないとしても、妹を泣かすことには彼に対して無理だ。

想像したその子の泣きそうのシーンが起こない。少女は『食べべき』の表情にして、一馬のところを直面してる。

『あ。ご馳走さまでした。』

なんですって。あの子は疲れそうにもう料理台の潔い中部で寄り座つてくれた、はやり嫌いな子、一馬は我慢してくれない。

『シッ』

『これは強奪でなくてなんだろう』って一馬が言うつもりばかり、少女には中断された。

『先生がくるぞ』

つい先自分の大声は周りにも影響された。

普段に一つ二つの女子が一馬のところで料理を関する問題を教わることには珍しくなくてもそんな激烈な『争論』って目立つ過ぎるだった。

中間テストに続行してる、生徒だちの見物心が手の上の仕事で蔓延していない。ただ多少の学生がそっちの様子を少し見るといったところですが各自の料理作りを戻った。でも、料理教室の先生は圈外だから、こつちの騒ぎを見逃すのはいけない。

『君だち、何があってるんですか？』

先生の足取りが遠いからここに行ってくる。ちょうどいい。一馬は先の話はそのまま返して先生を告訴するつもり。あの短髪の女性教員にはうちの学校で面倒では有名らしいだ。当然、面倒って規律を生徒を守らせることだ。

少し中性の声は先より近く聞こえた。『現在には玄武高校一年の間テスト、誰にもこの試験の安静を守るべき、それは鉄則だ。』

もう一度教師の立場を宣言した先生はこの二人を見て、探偵のように現場の事情を観測してるそうだった。

『先生 あの身分不明の小学生はおれの試験料理を奪い喰った。』

一馬の目の前、あの先生はジャージの外でエプロンを被って、まさか以前体育先生から転任したもの？取りあえずうわさ通り先生はあんな面倒として自分のテストは助ける可能性がある。せめて時間が延びることができるはずだ。

『騒ぎは何？』

パジャマの中先生は赤いメガネを取り出すと思いきや、まさか先からここにあったことに全然見えなかったのか。一馬はそう思った。

『俺はその小学生……』

『小学生と言いつ方はやめてくれ！』

背の高くないその少女は腹立ったらしい、頭飾りの結うがぶるぶる震えてる。思わず、彼女が台から降ろして自分の厚底靴で一馬の足を手痛く踏んだ。

『わわわ。』

この声で先よりもっと酷い。同じように、少女は何もしてないまま、目の中で一馬のことにまた憎みが残ってる。

おいおい。復讐にしても限りがあるだろう。始めて女の子はそうした行為が驚いだ一馬も初めて女の子って嫌いが生まれる。この子は妹ならきつと大変なことになる。

でも、先のことに先生は明白に見えたぞ。自分の理屈を探すのって犠牲が必要だ、その気持ちを持って、彼はもう一回がまんしてくれた。

先生はようやく自分のメガネをかけた、でも先の場面にはミスしない。彼女はもう一度に二人を確認して、一馬を向かった。

『君、一年エー組の兼城ですか』

『はい、先生。』

そう一馬が答えた。

『ささつとお嬢様を謝ってくれ。』

厳しい声が確かに先生の威信を思い切って表現したけれども、何故急に一馬を命令する？『お嬢様』を謝るのか。しかも、その『お嬢様』とはどちらの方ですか？

『お嬢様？』そう疑問した。

『お嬢様。』先生は丸で氷りみたいの顔が冷たい口吻に銀髪少女の傍に寄った、そして標準式の辞儀にして彼女へ敬意を致し。

お前はメイドか女の執事か？もう想像不能の一馬が先生のそばで愕

然に對する。

『今 この料理台はあたしから占拠した。』

少女の言葉を聞かれたや、先生は教師としての姿を戻る、『一馬君、今日からその席の帰属権つて、お嬢様を転移する。』

嘘じゃないか。一馬はもう狂いたいまま。

『それは入学から俺の席だね。現在のテストはどうになりますか？』
このお嬢様は一馬の言葉にちょうどきらいがあるそう、気に食わない顔が出てくれた。

『早くここに出ていきなさい。なければ 校則違反と同じ。』

何故助かりを願いたい自分は悪くなったのかさっぱり分からない。

一馬が弁護の必要もなくなったそうだ。しかし先生から『校則違反』を聞いた同時彼はなんでも感じると覺えた。

自分はどこかの勢力の首を踏んだはず。それに本当の強いだね、あの小学生っぽい少女にはただ一見で先生を服従させた。

どんな勢力か、あるいはあの短髪の女先生に体育教師の前、この少女の本家にメイド役をしていたのか。

何があつたとしたが、今一馬は今学校の通路に歩いてる。テストのことに考えて、優秀とはいえん、合格までも無理だ。

『くそ。』

とある電柱の傍で彼が止まった。ここは学校と学寮の間の商業区域とされている、最初の電柱は中心として次々にお店が営業している学生のため商業団地だ。

その電柱の付近に一馬のよく来たスーパーがあつた、『行くともなしにここに行っただね』独り言をした彼が最終に自分に好きなのところへ歩いてきた。

好きにもまして、依頼のほうがもっと適合だ。特別にスーパーの中で、食材が置いた場所って一馬が一番に知っているんだ。

『今日は牛肉のセールらしい』

便利流の奥義には有限の材料に無限の味にさせる。それで最も重要なことは、どうして安い食材を買うことだ。

そのポイントをはっきり理解してくれた一馬がスーパーを狙った。

『今のうちに、マイ牛肉さん、マイ野菜さん、マイリンゴさん、俺がくる。』

先の思いが辛いとしても、この人生を存分楽しめないでだめ。これから、すべてを忘れるハーピータイムですから。

この調子で一步にも踏み出さない一馬には、体がいきなりこの力が引かれた、地面へ転んだ。

『もういいよ。まったく。』

不幸なことが連続した一馬が地面から空へ見上げて、綺麗な雲を觀賞する気はない。今回に自分が何のためにもんどりうつて転んだのか。

水平線の角度で、制服のスカートらしい姿が見えた。『すみません』つて一馬はお詫びを言っただけ、自分の口を殴る気が出る。

『まあ、ちようど許してあげる。』

鋭い子供の声が耳を衝撃した、例えば百遍死ぬまでもあの子のことを忘れない。先の『お嬢様』つて今自分と衝突した人は同じだ。

『どうしてお前がここにいる？』

一馬は即座に立ってきて、少女の顔を質問する。

『先 痛いよ。男として転んだ女子を見捨てて、片手でも伸ばさないうで優しく引き上げない。それはべきことか？』

少女がむかつかったらしい。『まあいい、謝りの分で先料理教室の無礼を許したが、今回のぶつかりにはだめ』そう言った少女が土から起きて、白紙のものが一馬を寄こす。

『持つて。』

『それは何だ？』

白紙の裏に申請事項みたい文字が書かれてる、よく見て文字の内容は料理学科の追試申請。

『先生から持ってきたものだよ。追試の成績は正常テストの成績と同じ決算するって』

変。絶対に変。

一馬はゆつくり少女の顔を見回て、なんとか悪戯か陰謀かの推測しておかない。

『別にあんたのためにここにくるよ』

白い綺麗な皮膚、日の光の下で純粹になつてた。でも、腕の部分はちょうど、先のぶつかりが浅い傷口が付かれた、赤い血が流れてきた。

この事情を見た、一馬の心が弱くなって。その子はただの天然系、自分が知らずに他人を迷惑をかけるだけ。それに、申請書までも連れた、本当に悪戯のいい子かも。

そう考えてる一馬の顔がちょうど緩やかくなった。本当にどこの家のロリか、高校生のくせに身長が体つきの中等の一馬の肩までも届かない。

『あたしが光を探しにきたぞ。』

また光か。

少女と言う通り、あの光には『形がある星辰が飾ってるものだ』、その形はどの形だか。どう見てもオカルトみたいの物理現象だろう？でも、入学以来、この光を関する噂は全然聞くこともない。

急に少女の様子がおかしい。

『見て、見て。光が現れた。』少女の声の共に、彼女が踊って始め。宇宙人を招く技？一馬が少女って陣型のステップを見てるけど、それを除いて、ほかの景色に全然変わっていない。

やがて少女の顔は微笑みが現れた。

『光の頭部。光の肩。光の足。光の後ろ。』

『おいおい。お前の光がまるで人じゃないか。』奇怪な歌を聴いた一馬がああ光を想像してそう判断した。

少女の歌が止まった。へらへらと一馬の向こうに寄った。

『正確に言くと人の形がある、人の形がない。』そう言った少女が頷いて、『あんたは本当に何も知らないね。』

指を出して、雲の方向へ指す。思わずに少女がすこし楽しみになった。

『あんたは光を招く能力がある』肯定な口調に一馬の体を観察して、『あたし過去の研究は人として光の媒介のがしなかった。そうですね、きつとそうです。』何が変異なる眼差しが少女の目から溢れるそう。

きつともつと激しい悪戯がくるぞ。一馬にはこの少女へ不思議な感覚を感じた、彼女はその光と同じ、存在は触れない。

『あたし今急用がある、あんたが携帯番号とか連絡の方法があるか？』いきなり少女がそう一馬を話した。

『え、あるですけど。で、お前がちょうど唐突の違和感がないか、いきなり。』

『さつさと言え、こんなぐじゃぐじゃ。』

『でも…わたしだちにはただ通り過ぎだろう、どうして見知らぬ人自分の携帯番号に』

『あんたが選ばれたよ。』

少女の目はもうピカピカしてる、その目の中できつと何の真理が見つかった、もちろんあの真理が別人にとって永遠に分からないこと分らない。もしかして以前同じ状況と出逢ったの一馬はきつと知らない人を拒絶するに決まってる。今回はだめ。

手の中に握ってる申請書といかんと問わず、一言で先生を命令したのは能力すぎるのか。

『俺の番号は…』

『待って。』

少女はもう一度いきなり話した。『やばい、携帯がどこで見失った

そう、記録のは無理ですよ。」

バッグはない、自分の制服スカートでただ一つのポケットとに探しつつ彼女は残念の目がした、でも数秒後、新しい生气に復活した。

『紙とか刻めるものを…』

『携帯を寄せ。』

一馬がいい提案まだ口の中でもぐしてるうちに、少女が上司みたい口調で彼のところへ手を伸ばしてきた。

『俺の携帯？』

『もちろんです、あなたの携帯があたしから保管して、明日あなたは玄武高校の「特」玄武組にくる、あたしを探しあたったら返すぞ。』

言葉が耳に入った同じころ、本来一馬が番号交換のために取った携帯が手の中に消えた、あの少女の姿が凄く早さに消失した。

玄武組か。少しスーパーへ歩い出して、一馬がそう呟いていた。

玄武高校にはエーからエフまで入学の成績にいかんで各生徒ばらばらにして再結成した、その目的は当然競争の意識を守って、優等一
の思想で市内の学校の中で自立することだ。

話す必要がない、どんでもない一馬がエークラスに入った間、ビー以下たくさん生徒から嫉妬の目が襲った。蜚語と罵言の意味が一馬がそのエーの位置から出ていけて。しかし、運がいいか、なんとかエーの地位が自分のものだ、そう考えてる彼が今までこそずっと努力してきた。

エークラスの上、本来何の階級もないだ。七年の前、新しい副理事長が来てくれた後、『特』という案外の階級に生まれた。

『特』って新学期の頃、各理事が自分の準則に潜在力って認定された生徒を選抜して、『青竜』、『白虎』、『朱雀』、『玄武』に四つの組として集める。

その中、玄武が一番強いクラスそうだ、彼らが普段自由に行動し

て、校則さえも縛られない。それといったら、料理教室で先生が自分を校則違反と言ったのが確かに理由があるんだ。コインの外にいる俺がコインの裏にいるあの少女に影響力がない、そとで逆に侵蝕されるかもしれない。

とうせもうその子と関わった、タコ焼きから携帯までも奪われ、何という不幸だ。

あれ。『がち』って足元が小音がしたそう、何が踏み上がった感じがした。

一馬がすぐに足へ見て、黒い携帯電話みたい物が足元の下の地面がある。まさか先あの少女って踊っていた時落ちたのか？

腰を屈めて、その携帯を拾い上げた。その携帯は女の子らしくない地味の黒、長方形で滑らかな外殻、スライト式の形、珍しいタイプだ。そして中心で星かたちのような宝石飾りがある、それは機体の一番に目立つ場所だ。

拾ったものが落とし主へ返す。そう決めた一馬は明日に少女のところで確認すると考える。

銀髪少女のおかけて、今日の牛肉セールが間に合わなかった。お腹がすいた一馬が自宅へ戻ってカップラーメンを煮る仕方がない。

自宅と言っても、正体は電柱の尽きにある学生寮だ。もともと二人の配置した寮で誰にもそのどんでもないやつと一緒に住むの一馬が一人になってしまった。

カップラーメンを食べて終わった。一日悪運ずぐめの一馬が洗面台に行って、顔を洗ってそして寝るつもりだった。

その時、ポケットの中で突然に大きな歌がする。

『何だろうか』びっくりした一馬が先拾った携帯と思い出した。『携帯電話か』ってズボンから携帯を持ち上げ、やっぱり音の源がこ

れだ。

不意に携帯の電源ボタンを切た、先の『光の頭部。光の肩。光の足。光の後ろ。』というなんて歌詞を聞いた。

その携帯の持ち主は確かにあの少女だね。

急に意識した一馬が携帯を慎重に洗面台の上で置く。何が変の感じですね、先電源を切った時、自分のご迷惑を避けるつもりなの、だがあの少女ときたら、避けられるのか？

もう一回石鹸に手洗った一馬が壁に掛かっている鏡を見た、『神様…』

……『嘘じゃないか』

『守ってください』って言い出すと思う途中、バーフルームが真っ黒になった。

『何があつたの』

普段の停電そこからの街灯がここの光線を維持するはずだ、でも今日の停電ってそこから月星の光をおいて何もいない。

最初は地震と思った一馬が洗面台の下まで潜り込んだ、針の一つにも落ちらないのを確認した後、彼が再び下から鏡へ潜り出してきた。というか先からの停電が一体…

独り言は未だ終わらなしに自分の鏡の中で映っている顔を見た。

『ええ、顔がちょうど汚い』鏡の内面、自分の前額で何が赤くて薄い光の点が移動してる、やっと眉の中心に止まった。

『これは狙撃銃の赤外線じゃないか』耳から巨大の爆撃音が後ろから襲われた、もう死んだと思った一馬って体が無事と気づいたまで目こそ開いた。

それは銃声じゃない。

ていうか今の赤点は赤外線なら普通の鏡が反射できるのか？疑問はすぐに解決された、鏡の裏でどこからの人影は一馬の背後と触り付いた。

部屋は暗くてただ影が一人の女性の声と肯定したけど、気楽には早すぎるだった。一馬の首筋がいつか完全に片腕に締められた。

『目標発見、今すぐに身分確認。』

鏡の中で防毒マスクを被ったみたい女の様子は見えなくても、声の要素とは一馬が記憶があるそうだと。

知り合いか？

急所は制圧された彼が周りの事情を観察して、もう一人の影が洗面台の前に急出現した。

『追跡装置捕獲、今現場捜査中。』

知らない男がどこを報告してるようだ。一馬の傍が無線電らしい雑音が響いてきた、そしてまたその男から『はい、分かります。』と聞こえた。

何なんだよ。男は洗面台の上にあの黒い携帯を回収した、ピストルを持って一馬の顔へ照準した。

赤ラインは再び顔に現れた。先に僕の頭を爆裂する気のはお前か？一馬がそう思った。真っ黒のバーフルームと正反対、男の手の平に上がったモニターが明るい蛍光が見えてる。

『兼城一馬、玄武高校一年生、特長は料理…』

モニターの中でデータみたい物がある、一馬の履歴がああ男の口から読み出した。

『読み過ぎるのは校則違反ぞ』

いきなり女が男の陳述を止めてくれた、この瞬間一馬が全部覚悟のように言い出す。『今日料理教室の先生だろう？』

確かに『校則違反』って言った頃、その特別な一言は一馬の心で深く刻み込んだ。だから朝のメガネ女先生にそのくらいの再認にもできる。

次の時、あの試験監督として一馬と認識したばかりの先生はショックみたい手が緩やかくなった。

チャンス ゲット。

柔らかい胸から離れるのは残念だけど、ここには銃を持ってる奴がいるんぞ。一刻たりとも早く一馬が女先生の胸から逃げられる一馬

がようやくバーフルームのドアまで隠れ込んだ。

ここから一步にも踏み違いわけにはいけない。

一馬の行動は甘い、でもこの甘さを気づいだ彼はもう遅かった。ドアの外をちょうど見てきたところ、蹲まってる途中に歩兵銃をかける奴らを押された。武装してるやつらが懐中電灯の下で一馬を自己の威力を警告する、彼の前で揃って並んだ。

『兼城一馬、我らのお嬢様の携帯が何故お前の手である？』

『はやりか、お前やはり今朝の先生だ。』頭がすこし上がった一馬の視線に、あの女がもうマスクを取り外した。

『もういいよ。そんな臭いマスクなんて』

周りの武装者たちが先生で自分の正体が見せるなんてそわそわになった、『長官さん』ってひそひそ話してやがった。

防毒マスクの中で、またメガネが置かれるとは思わなかった、懐中電灯の光線はその凹凸の輪郭を強めて、先生ってこんな大きな胸にも思わなかった。

見るともなしに胸を見た一馬の顔は赤くなった、今確実にその巨乳から逃げ出した。

『どこに見てるこの変態野郎。』

まっすぐに一馬の口のところで強い一撃が当たった。

『やめてください』痛みを感じた一馬はすでに冷静になった、手が頭部を保護して、丸にしゃがんだで大声を出しじまい。

『何故俺を殴る？お前らのお嬢さまは誰？』

『この話はあとでゆっくり話すぞ。』

目が眩しくて、先生の唇の動きを見えいた一馬が意識なしに何も見えなくなった、ただ眠りたい。体が軽くてどいつに運ぶようだと感じてきた。

『一馬、起きて 遅刻するぞ。』

『もうちようど眠らせて』

お母さんの声じゃなくて、先のは夢か？『ウイ、寒いだ。』骨までもある風を感じた。何がおかしい、鼻から嗅いたとは新鮮の空気だった。

目が覚めた時、一馬が死ぬほどの怖いを見た。先から背部は堅い鉄柱のようなものを感じたまま、それは体を固定する為だ。

もちろん、自分の体です。一馬が早く尽きて周囲の事情を確認するが、現在手と足が鉄柱の上に縛られ、その鉄柱が空中に横に掛かっている。

今はバンジージャンプ？

一馬って毛細血管まで縮まった。

ここはどこ…月は以前より明るくなったそうだ。ちょうど前で自分が空中に縛れたことが認知したといっても、一体どれほどの高さが知らない。だが、今のはこの月明かりを見た以上、ここには『伝説』という『理事長ビル』と間違いがない。

その『理事長ビル』と言って、玄武高校の前任校長（理事長）が募金して建て上がったの150階のモドンビルだ。このビルについて話しが厳密だから、今まで何故学寮の後にこの偉い建物を創造するか誰にも知らん。

しかし、その坂道の尽きに聳え立ったビルが『特』クラスの部室とする。あのメガネの先生という通り、『特』の『青竜』、『白虎』、『朱雀』、『玄武』には校則以外で行動にもできる。

言い換えて、奴らは学校でただ一つの勉強は部活だ。

もしかして、自分を襲った者があいつら？ふっとこう断想した一馬がもう一度その月明かりを見た。間違いない、以前で遠い場所にその建物を眺めた時、今のは同じ。月はビル外のガラス層の関係で、明かりが増幅してるように綺麗になった。

つまり、暗い視線がよくない今のうち、自分が学寮から理事長ビルのとある階段まで誘拐されたものだ、しかもビルの外。

『お前はいつまで寝るつもりか』

熟知な女声が耳にくる、ビルの階層段に置いた照明灯が鉄柱辺りの環境をすべて表した。ジャージに籠まれた胸がビルの等身窓で出現された。

何故が付き合われたは未知だがまたあのメガネの先生がこんなタイミングでいてくれた。

『遅刻よ、これから…調教の時間』

後ろの鉄柱が激烈に震えて始め、よく見ればその鉄柱が管状で、窓に延びった部分は定着がないんだ。

いいえ。今の鉄柱のバランスを維持してるのはただあのメガネ先生の足元だった。腎線素が増えて頭が落ちたようでも、一馬の中にただ生きると残ってるばかりだ。

『勘弁して下さい、なんでもやれる。』

必死に叫んだ言葉は何とか効くように、鉄柱の振動が止まった。左目が開いた時、無表情の先生の顔を見えた。

『その黒い携帯が誰から貰ったのか』

黒色の携帯ってその宝石が中央に象嵌してる携帯が間違いない、あいつってあの携帯の持ち主はその『お嬢様』という少女が知っていた何故また自分を聞くのか。

考えの時間がない、鉄柱が二度と震えらんばかりそうだ。

正直に今朝にあった始めから、『あの少女に第二次に出会った後、少女が踊っていた足跡で拾った。』までの過程って言った。

数秒後、先生の足が急に鉄柱から離れた。

『やめろ、これは本当だね。』

落ちる場面が出現しなかった、どこからの力でその鉄柱が引き入れられてきた。そして防毒マスク方は一馬の縛られた糸を解けて、ようやくからからの感触から出ていてくれた。

建物の中、見えるものはずっと先より多くなる。

先ずあの鉄柱の尻にある鉄線にここの柱と繋がったことが分かり始

めった。狙われたのは自分の命じゃなかった、そう一馬と思った。こっさりメガネの先生を見て、手中に無線電のような装置に誰がを通報してる様子だ、話し終わる時、彼女はすぐにこの部屋から出した。

この部屋がでかい、左から右へ眺め切れ、サーカーの競技場の規模らしくの広さだったね。そう言えば、ここは会議室ってありえないで、ただ二つの椅子が置いている。

なんメートル以外、一つの椅子が自分の傍の椅子と相まって、部屋を方形に間隔してみたいだ。

『ようこそ、わたくしの広場。』

遠くのあるところ、エーコと共に男の声がした。そして、黒曜石様式の地面から、奈落昇って一人の男が出た。

『ここは玄武高校の壮麗の景色、まるで競技場みたいの理事長ビルには必ずその「競技場」の様子を作ること禁じ得ない。』

その人が椅子の上に座った。

『自己紹介しましょう、わたくしはこの学校の副理事長。とはほどこいて、「特」白虎クラスの委員長我妻準星です。』

我妻準星？その子は玄武高校の前理事長、我妻正司の長男だと、入学式からもう知らずわからない。新入り大会で彼が理事長の役に、演説をしただけと、自分の席が遠い過ぎて顔がよく見えなかった。現在のは本人か？そう言ったとたん、準星の席は丸で車のように自分の前にただ一秒で走り着いた。

早い。一馬が先の速さとびっくりした、どうしてこの普通なオフィスチェアがその速さを持つてるのか。

確かに一馬の望みどおり、準星の顔を見た。綺麗な銀髪が耳まで至った、中で金色に髪染めた。白い顔の上、耳がピアスに飾ってる。そして、ラップシンガーのジャークを着てる。

お前不良か、何故入学の時に気付かなかったの。

準星が一馬に見てくる、そして感情なしの笑顔をした。『びっくりするの必要はない、その椅子がただ加速装置を入っただけです。』エーコを消音した声が女性っぽくて優しいが浸まれた、でも何故その形に俺と合わせるか。

『先 新野先生から聞いた、君はその「お嬢様」に合った、そして携帯を拾ったはずだ。』

この一瞬、準星の目がいきなり本気になって、圧迫の勢いでつい先と比べて全然違い。そうだ。

あの胸の先生は新野って呼ばれるか。

一馬が先からあの我妻準星の笑顔を見た時、何故おかしいの感覚がする。ああ、そうだ。そいつが人よしが全然、もともと新野を指示して、俺をバンジージャンプをさせんばかりの腹黒いさんだった。ただし、今の自分がそれを知っても非力だ、他人の巣に踏み込んだ一馬がそう考える。

『それはそうだ』

またその事実を言い重ねた。

事情を確認した準星はあの携帯を持ち上げて、一馬の前に揺ぎ動かしてる。

『小僧、取引をしたいよ。』

拒絶なら死ぬの表情で、準星の話しが続く。『その「お嬢様」はあたくしの妹、この携帯は彼女を守るため作った追跡装置です』

驚いはいない、先あんな高速スピードの椅子にも目にかかった以上。

でも、『その小学生はお前の妹？』

そう、これこそ一馬の疑問だ。

『小学生？』

一馬のこう言う台詞が思わなかった準星がちょうど意外の顔が現れた。その上に妹のことを及ぶ時は萌えの笑いがしたそう。

『我が可愛い蝉麗って 以前その言葉を聞いた時大袈裟に怒った。』

それにしても、あの子は本当に小学から可愛いんですね。って影響がない。』

そのまま、準星がどこに沈んだように笑ってる。数分後、彼の様子がようやく平静した。

一馬の目が死んだ顔にしている。

『お前、シースコンか？』

『いいえ、別に蝉麗のことを』いきなり『シースコン』を聞いた準星がてんでこ慌ててた。

『君に関係がない。』準星の椅子がちょうど遠くなれ、『わたくしが取引の話で 君を伝えろと』

椅子をすこし移ろって、会話が継続する。『今朝で君と蝉麗の出会いがもはやたくしに掌握した。確かに偶然でその装置を拾ったはずだ。でも、お前がもうわたくしだちの存在を知っていた。つまり、お前はこの学校で存在する必要がないんです。』

話しが止まった。

準星の指が『キャ』ってパツチンした後、広場のあちのガラス窓で横に並んで開かれた。猛烈な風は皮膚を切り裂いて、ほとんど目までよく開けてない。

『さあ 小僧、選ぶよ』

準星が一馬の向こうに行ってきた。『以前わたくしを治療する私人医がある話が教えてきたが。人が高度の恐怖の下 記憶喪失にも可能、恐らく、生活能力までも影響。』

雲は準星の話と相まって、月を遮て真っ黒の空になってくる、霧困気は恐怖になった。

『本来なら 君の運命が鉄柱と一緒に今晚のことを忘れてこの学校から出ていけだけです。でもなお、わたくしには一つの提案もあるんです。』

空を見たたん、先の怖さが一馬の脳で急に映り出し、もうあんな

遊びをしたくないです。

『何が考えてるの早く喋りなさいよ。』

もうふるふるにしている一馬がそう回答した。

『わたくしを従って、蟬麗を接近して。そして恋をする。』

『何だと』何故その兼城一馬の自分を狙ったのが分からないけど、どうの考えでいきなり知らない人が自分の妹と恋愛させるの不思議すぎるだろう。

一馬がもう土盛りながら話しをしていた。

『何故俺、お前の家族が通り過ぎな人を特別の感情に持つてるのか？』

『君の権利はイエスオーノーだ、その原因って知る必要がないんです。』

ますます腹黒いの微笑みを見た、一馬が選択しかない。

『イエス。』

本当に言えば、選択肢が『イエス』以外がない。例えばアウトマンが転落途中で自分を救いに来て、明日の授業にも無理だ。

相手の身分は副理事長だ、一万歩に下がれ、『特』白虎クラスとしてただでここ学校の校則を無視できる。ただエークラスの普通の一員で何をできるか。

『いい選び。』

準星が笑いながらパツチンをして、ぼきんと響きがしたうち、天井の上、奈落ようなものがここに降りてきた。

『これは150階目を直達するエレベータです、蟬麗はあそこにいる。』準星は本気な口調で一馬へ話す。『現在から始めに、君は白虎クラスの一員だ、そして君のファストミーションはこの黒い携帯に蟬麗を届くから。』

『あの小学生…いいえ、我妻さんに』

『はい。脚本の通り、それは絆を結ぶ第一歩です。』

どこの脚本か、お前が人の感情をどう遊ばして足りるか？その話が言えなかった一馬は奈落を進み込まれた。

『わたくしはここに送るまでだ、白虎の活動範囲はこの80階から100階までだ。上位にある青竜のクラスは100階から149階まで、そして第150階のは蟬麗にいる玄武クラスの部室。』

『はあ。』未だ聞き分からない一馬がその奈落で自分の体がふわふわに天井の中枢へ運ばれてると見ている。

長い。この広場の縦はなんメートルだか？大体30秒にまだ新しい階層を辿り着けないまま。一馬は退屈に立ってる。

奈落の隅に突然準星の声がくれた。

『もしもし、我妻です。今無線電に話してる。』

奈落の隅でスピーカーフレームらしいものが響いてる。そう見えた一馬が『分かった』と返事した。

『よく見る、後ろが君の携帯にあるだ。』

準星という通り奈落の畳の上、ある白い携帯があそこに置いてる。

腰歪んだ一馬が携帯を拾った以後、あの蟬麗と同じタイプだと気づいた

『携帯の中段、宝石が付かれた部分が追跡装置だから、気をつけて

』しばらくつて『ああ、話し忘れた、これからのエレベータのスピードがちょうど速いですが。』

未だ未だ話の途中、エレベータは天井を突破して、ロケットのような速さに。一馬がロケットが乗りませんが、ただこの吐き気は以前ジェットコースタを乗ってる頃と同じだ。

瞬きをしたばかり、広い空が見えてきた。

ただ一秒でビルの上部に到達？

エレベータの信号はしばらく後まで回復した、狭いロームの壁が四面の視線を障っている。

『もしもし？』

今回の声は頭の壁から届いた。『はいはい。今君が立ってるのは理事長ビルのトップです。100層から149層に青竜の奴らが占拠された、信号にはちょうどぼんやりしてるの。』

じきじきな雑音はスピーカーから騒いでる。

『話が別です。次のことは君自身に蝉麗をしてください。』

会話線が切れたらしい。白い携帯はポケットに入れながら黒のほうで手で握り締めた一馬はロームから出てくれた。

やはり屋上の風景には違い。これは万博会場か？

先と同じ広大な空間で、別々に城のような卵が立っている。形状は異なっても、白い丸の頂端が半円の穴が開けられてる。

城と城の間、大理石敷きの道路が繋がってる。

遠く見ればその半円の卵は多すぎるじゃないか、一体どこにいるんだよこの小学生。

歩くぼんやり中央に歩いたら、不意に大きな円形卵建物が現れてきた。

でかい。同じタイプの建築、この円形は先より何倍にも大きい。でも、この卵の対面の半分が青い。それだけじゃない、卵と中心に白と黒の交差線として横へ延べ、対面の卵はずぐめ青いである。

まるで、これは二つの陣営だった。

そのまま、一馬が白黒の分割ラインまで歩き付いてきた。

『ここには一歩にも踏まないで』

突然蝉麗が後ろに現れた、鋭い声と共に殺到し。一馬は振り替えて、制服姿の彼女をもう一回に見かけた。

『あんたどうやってここにきたのか？携帯には明日って約束したじゃないか』

警戒の眼差しと一緒に、早すぎって準備はない表情が顔に映っている。

『まあ。』

何と言いつて未だ考えらない。

空中にどこかで分ならず、新野先生の声が伝わった。『お嬢様、兼城さんはあなたのために携帯を持ってきたのです。そして身分を確認した後、ここに来てくれたって坊ちゃんの意味でございます。』

やはりお前はメイド役だ新野先生。

そう了解した一馬が蝉麗のほうへ見て、何がばれたようって感じてきた。

『次は勝つてに人を入れない。』

『もしわけありません。お嬢様。』

声が消えた。

蝉麗が声を出さず一馬の位置へ向かってる、『あんた、あの白と黒の分割で、踏めないほうがいいぞ。なとしたり、あたしの敵になる。』

『携帯』

身の傍に蝉麗は手を伸ばして、一馬の胸のところで止まった。借り換えす表情に彼を見てくれた。

渡した。この第ミツションがどうの褒めることになって分からないで、蝉麗の顔で『心』指数が全然増えてないらしい。

完全、静止になった。

『何故ここには沢山の卵があるらしい』

ごく不自然に一馬がその『小学生』と認定する女の子を話しかける。すべてのものをそらしてるまま、蝉麗の目を直視してない。

『卵じゃない、天体観測台だから』

煩がって、蝉麗が目の前の方に説明してくる。『観測台の中央、望遠鏡があるだから、天井の部分こそ開いている。』

『こんな多い、天体観測台群と呼ばれるほうがいい』

『あんたは指摘の資格がない。』

腹立ったのか、あの子供っぽい少女？俺には何でも悪口をしてなか

ったのに、その場所がお前の禁地だか。

『ああ。兄上のせいで、あいつどうして父上の話を聞いて、149層以下があたしの居場所じゃなかったって行動するか』

『出ていけ、出ていけ！』

『わわわ』そんな尖鋭のウオイズ以上、大声まで蝉麗が恐ろしくなった。一馬が一言もなしに逃走してしまった。

やっとエレベータのロームに戻ってきた。必死に走り続けがそんな疲れになった、このビルの距離感を軽視するだめと気付かった。

同じ圧迫感を受けた一馬、すごいスピードで100階を戻った。奈落から出た時、一馬がすぐに準星の怒り顔を見た。

『君がアホか？どうやって何もやってない女で追い出されたか？』

一馬が文句を出さず、ただ陳述に表現して不満を漏らす。

『ああ。先からの話を聞いた時、兄上のせいでって聞こえました。』

『そうですか』

準星の笑わない笑いが浮かんできた。『君はよく見たの、何も知らずの白よりましですね』どうか真剣の目が彼の顔に現れた。

『君と言う通り、蝉麗がわたくしを憎んでる。前からの言葉が君に試しての為だ、あたくしを選ぶ者が蝉麗のことを見通せずなら、兄上として失格だ。』

気分が急に沈んだ、準星は身から一枚の写真を持ち出した。

『あれは？』古い写真の中で、一人の小学生が壁のそとで笑いなり、立っている。黄色のカラー帽子が被され、そして中学制服が着ている少年がそばに並んでる。

『小学生の時の蝉麗ですよ』

幸せが溢れてる準星の顔に沿い。あの子は今まで身長が全然変わってないらしい、胸には大きくなったので著しくてそれはブルーを飾るくせだった。

彼女は病気か？

『あの子はね、小学四年から体の成長が遅くなった。究極の原因は、賀馬市内の中心にいるその隕石です。』

ちようどシヨックした。蝉麗のは小学生っぽい、我儘、御嬢さん気としても、病気の属性はまったく思わなかった一馬が彼女と「隕石墜落事件」に繋がって無理だ。

準星は続いてる。『あの子はね、わたくしとあの事件の正体が一緒に見たです。』

服中の無線電を出して、誰を命じた後、巨大なこの広場が東のガラス窓は全体に展開した、窓の上部が開いたから、風が一馬のところに辿り着けない。

ちようどいい。あの方向に向かつてる場所が賀馬市の中心としてのもと商業街だった。だが、十年前の事件で廃墟になってしまった。

100階の高度、隕石少女の首と筋ははつきり見えていき。痩せた体が繊弱の腕で曲がられた、哀願の目は黒宝石のようで泣いているまま、それで隔離の工事が未だ膝に完成した。だが、今までこそその困いを発見する一馬は自分って鈍感と覚えた。

『十年前、蝉麗は未だ小学生の頃で、天体観測が好きになってきた。父上とわたくしが彼女で一日中望遠鏡を見るばかり、そして誕生日の時、偉い天文観測台でプレゼントとしてあげるって約束した。七年前、今のビルが建っていない頃、精密の観測儀など貴い望遠鏡を買ったなのに。』

どうか準星が溜息をした。『それは後話です。その隕石墜落のちようどの前、蝉麗は商業街のところを行かないでならない。その時でわたくしが蝉麗に対して単なる我儘に扱った、彼女を心配して付き合ってくれた。』

『でも』準星は隕石のところでじっと見つめてる。『あの日はね、空が真っ黒になってくれた、昼のくせに星空にも見えた。光、白い水晶が飾られる光はその暗黒の空から現れた、すべてを食い込み、

生き物も生きてないものでも、地獄のように……どうしてあんなところから逃げられたのは分からない、目が覚めた時、あたくしだちのそばにただ廃墟しか見えないん。』

準星の言葉どおり、周りの人があの頃の事件大体知情している。少女らしい隕石のせいで、負傷者は13000名以上、財産損失計算不可、そして最大の商業センターは永久性終業。

準星の顔がますます不味くなってきた、深呼吸までしやがった。

『お前は蝉麗は光を探すことは知っていたか？』

準星の頭が少し下がった、少々平気になった。そして一馬へ目に向かった。

あの大胸の新野先生は拷問の手段でもう知ってただろう、何故逆に問いかけるのよ。そう一馬がただ頷いただけだ。

『その事件以来、蝉麗はずっと光を見えると喋ってる。そして、皆だんだん離れていく。父上は彼女が精神的な病気を認定する。そして彼女のためにその「光」のことを駆逐して、蝉麗でいろいろ制限をした。例えば、そのビルの分配と客人の通報。』

そりゃ先蝉麗は自分と合った時あんな目がかかった原因か、そのビルは彼女の目私有物とした存在だ。

今回は一馬の疑問だ。

『そう言えば、お前は蝉麗と一緒にあの光を見た証人だったな、何故父の傍に、その光の事実を否認するか？』

『わたくしの望みか？』いきなり準星の柔らかな口調が咆哮になった、座った椅子まで震えている。

『わたくしがただ……ただ蝉麗を守りたいだけだ。』準星は続き、『光を見える、そんなことは非常識でしょう。あんな鬼話の中に生きて、苦痛は決まった。その辛さを消すために、わたくしが絶対に彼女のその幻を潰す。だって、一旦そうしたら、自分は父上の同党になる。事実もそうです、もう蝉麗に嫌われたそのわたくし。』

ガラス窓が閉じてくれた。その兄の考えはどうだ？自分が鬼になった、無理に妹の「病氣」を消すの？どうやってその『光』が苦痛を与えるのは分らない、本当彼の言うままか？

本当ですよ。せめて準星の表情がそう信じてる。そのように、彼はもう一度話し始めた。

『君の身にある物は、わたくしと違う、情愛の素質にも可能です。蟬麗は初めて他人をこんな主動的に接触する相手は君です。』

準星にはジャークの中で本みたい物を持ち出してくれた。本の表紙で、『星座恋愛ピッタリの指導ブック』って印刷字がはつきり見える。

お前中学生？

つつ込み不能。準星にはその本の一つのページを開けた、文字を読み始める。

『水瓶座は双子座の相性が風属星座の中に一番高いもの、それで愛情の結果は良好。』そう読み通した準星は急に本を地面へ叩きつけた、『知るか！』って吼えてくる。

『因縁とかまわない。君に選ぶ重要な理由は君自身。両親は海外にいる、親戚の世話もなしに生きてる、存在感がない。そのような人として、恋は早く咲いて、早く落ちる。』

隣の椅子には、透明なモニターがもたれから突きあがった、自分の個人情報がつちに書いている。

『つまり、その原因はただの俺は存在感？』最後まで、一馬は我慢できないまま、話をかけてくれた、その兄上の目で自分の妹の彼氏は蟻のようとするか？

『薄い存在感。』完全肯定にショックされた、準星の目は何がピカピカしてる。『君は蟬麗とわたくしの踏み台だけです。妹を恋愛関係を建立した後、あの光はどんどん彼女のライブから消えてしまう。そしてある日、君は彼女に離れる。』

見えたね。準星は地面の本をちょうど覗いた。

『彼女は恋に落ちつたら、傷を与えるその光のことを思いたくなくなるはずです』

『その理論はあの恋愛ブックに書いているか？』

こう言った一馬はもう喋る理由がないと覺えた。その兄は確實のシースコンだった、地面でどこかの期限切れの雑誌つて、ネット上に掲載られたもはや早くない星座占いだ。

『それは君と関係ない。』顔が赤い、銀髪と白い皮膚ので易く見える。でも準星は未だいい加減を隠してる。

『今夜はもう遅い、新野先生は君の責任担当にして寮まで送る。それじゃ、明日で蝉麗の約束を忘れるな。抵抗は無駄です、学校の中はわたくしの目がある、大人しく蝉麗彼氏の役を果たしてほうがいい。』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3158r/>

星降り双子

2011年10月8日20時08分発行